

沙流川流域におけるアイヌ語地名と災害史の関連性

The relationship between the names of place in Ainu and disaster around The Saru River

北海道大学工学部環境社会工学科 ○学生員 佐藤舜佑(Shunsuke Sato)
北海道大学大学院工学研究院 正員 田中 岳 (Gaku Tanaka)

1. はじめに

現在使われている北海道の地名には、アイヌ語由来のものが多く存在する。その中には、そこで暮らしていた人たちが感じ取った地域の特徴から付けられたものも多い。北海道の平取や二風谷は、アイヌ文化発祥の地とされ、アイヌ語の地名や文化が多く残る地域で、災害に繋がる意味をもつ言葉を含む地名も少なくない。

本研究では、地名に表れている地域に昔から伝承されてきた災害の記憶を小学校・中学校の防災教育の中で伝え、児童・生徒が自分の住む地域の自然に目を向け、そこから危険性や災害リスクを見分ける力を育むことを目指している。防災教育に関する教材開発を踏まえて、本稿では、災害に繋がる意味をもつ言葉を含むアイヌ語地名が多く残る平取、二風谷を含む沙流川流域を対象として、そのアイヌ語地名と災害史を整理し、その関連性を考察する。

2. 沙流川流域におけるアイヌ語地名

アイヌ語の地名及びその由来においては、山田秀三著の「北海道の地名」¹⁾、平取町発行「平取町百年史」²⁾に記載のある山田秀三、萱野茂による地名の解釈、南哲行の研究³⁾及び、「北海道の名付け親」とも呼ばれる松浦武四郎による現代の日本語による地名がないアイヌ語の地名のみの時代における解釈⁴⁾を参考とし、地名を調査した。ここでは本稿のテーマに則り、災害に繋がる意味をもつアイヌ語を由来とする地名を抜粋し、整理する。

沙流川：三者の解釈は、いずれも「サル」（葎、葦の原）という由来であり、山田秀三によると「シシリムカ」（本当に付近が詰まる）という雅名も持ち、また、土砂が多く流れてくるといふ特徴を昔から有していたため、「沙」の流れる川という説もある。これらの諸説を合わせて考えると、昔から土砂によって河口が塞がる現象や、砂が出やすいことが、住民によって確認されていたことが分かる。

カムイエロシキヒ：沙流川下流の去場付近に位置する大きな崖のある地域の名前であり、山田によると「カムイ・エ・ロシキ・キ」（神が・そこに・立っておられる・処）という由来を持つ。南⁴⁾によると、「カムイ」について「カムイ（神）という言葉を含む地名は、地形が険しいなど人の容易に近づけないところ、通行が危険なところ、災害を起こす大きな自然の力が働く土地を示すと考えられる。」という事である。そのため、先住民が何を祭り、何をもって神としていたかは不明であるが、災害の可能性も否定できない。

荷負：山田によると沙流川の上流部に位置し、貫気別川と額平川が合流する地域の名で、「ニ・オ・イ」（漂流木がごちゃごちゃある川）という意味を持つ。流木の多く出る河川だったことが伺える。

貫気別：額平川の南側の支川であり、山田、萱野、松

浦のいずれの解釈においても、「ヌブキ・ペツ」（濁り水・川）という由来を持つ。いずれの解釈においても明確な濁る原因は不明であったが、松浦によれば、雨が降ると濁ると説明されており、よく土砂が流出していた可能性も否定できない。

トウナイ川：荷負より約 5km 上流に位置する。松浦によると、河口に小さい沼があったことから名付けられ、東側にがけ崩れが多発していたという事であった。

ルケツ：トウナイ川より 10km 程度上流の平取町振内付近に位置する幌去端付近の沙流川右岸の崖面を指す。松浦、及び平取町の解説によると「ルケツ」（崩壊する・処）という由来を持つ。その意味から、崖崩れ等が頻発したという事も考えられる。

ウエンザル川：沙流川の最上流部に位置する支川である。山田の解釈によると「ウエン・ザル」（悪い・葦の原）という意味を持つ。南⁴⁾によると、「ウエン」という言葉を持つ地名には何かしらの災害を経験している土地である可能性が高いという事である。そのため、この河川の災害の危険性は伺える。

以降には、現在の地名にはない松浦武四郎の解釈のみとなる地名を紹介する。

ピラカ：沙流川の河口付近の地域の名前であり、この村の下に大きい平崩れがあるところという意味を持つ。

ペンケニチンケフ：現在の荷葉付近の地域の名前であり、松浦によると、小川の中の大岩の上の木があって、洪水で流され、今は上に土もなく木が生えているところという解釈がなされている。地名の直訳なのか又は、松浦自身が現地で見ても感じたものなのかは不明であるが、この地域で洪水が起きたことは分かる。

ピョタサンケナイ：現在の荷葉地区の上流側に位置し、水が出ると土砂が崩れ、川口に穴開くところという意味を持つと松浦は解釈している。

ピラトル村：上述のものと近接している村の名前である。現在の平取が「ピラトル」という由来を持つとされているため、この村の名が平取になった可能性がある。地名の直訳ではない可能性もあるが、土地が低く洪水に畑を多く流出すると松浦は解釈及び説明している。

ウエンナイ：二風谷より少し上流にある地名である。崖が多くて悪いところと松浦は解釈している。がけ崩れなどが頻発したことが伺える。

カンカン：ウエンナイより少し上流側に位置し、現在二風谷ダムに近接している看看川を指している可能性がある。蛇行した川の流れという意味を持つと松浦は解釈している。蛇行しているという事は、増水時に氾濫する可能性も大きいといえる。

ホロカウエンサラ：現在の日高町付近に位置する。松浦によると、屈曲して悪しきところで湿沢蘆葦原などところという解釈がなされている。屈曲しているという事と「悪しき」という事から、洪水や土砂災害が起きていたことが伺える。

表-1 沙流川における主な災害史

日 時	原 因
明治 31 年 9 月 6 日	台風の通過
大正 11 年 8 月 24-25 日	台風の通過
昭和 10 年 8 月 29-30 日	猛烈に発達した台風
昭和 36 年 7 月 26 日	低気圧と前線の通過
昭和 37 年 8 月 4 日	梅雨末期の前線の通過
昭和 50 年 8 月 24 日	台風の接近通過
昭和 56 年 8 月 5 日	台風と発達した寒冷前線
平成 4 年 8 月 9 日	前線と台風の通過
平成 15 年 8 月 7-10 日	台風 10 号の通過
平成 28 年 8 月 17-23 日	台風 7,11,9 号の通過

3. 沙流川流域の災害

「鶴川・沙流川治水史」⁵⁾より、沙流川流域において起きた大きな水災害を表-1 に記す。この中で、詳細な情報が得られた昭和 37 年、昭和 56 年、平成 15 年、平成 28 年の災害について以後に詳しく説明する。

昭和 37 年：台風 9 号の影響により、紫雲古津地区、ヌタップ地区、オユンベ地区及び富川地区において氾濫した。また、平取築堤が益水、二風谷堤防が決壊した。

昭和 56 年：前線及び台風 12 号の影響により、平取町紫雲古津内水氾濫、門別町富川地区・河口左岸地区・河口右岸地区の各所で氾濫が起きた。

平成 15 年：観測史上最大の降雨がもたらされ、全川において計画高水位を超え、災害を引き起こした。平成 15 年台風 10 号北海道豪雨災害調査団報告書⁶⁾によると、沙流川において最も被害が大きかったのは額平川と貫気別川であり、その河川を中心として土砂生産や流木生産が生じた。下流においては二風谷ダムの洪水調整や堤防整備によって壊滅的な被害は起きなかった。しかし、沙流川上流部では、二風谷ダムに 67 年分の流木が流れ着くなど、大きな被害が出た。

平成 28 年：2016 年 8 月北海道豪雨災害調査団報告書⁷⁾によると、日高町よりも上流において、道路の欠損や沈没、のり面の崩壊及び、千呂露橋の崩落など、至る所が被災した。平成 29 年 11 月 15 日、ウエンザル川より下流を現地調査したが、ウエンザルと沙流川の合流地点には多くの流木が未だに橋脚にかかっていたことが確認された。発生した流木及び土砂の多く、被災が北海道の広域にわたっていたことが伺える。

また「北海道の地すべり地形」⁸⁾を参考に、沙流川流域における地すべりが起きたことのある箇所を調査した。その結果、荷負地点より下流においては、二風谷ダム付近の一カ所であり、多発し始める貫気別川に沿った位置に 7 か所、荷負の地域にも上述とは別のものが 8 か所、地すべりの履歴が見られた。更に上流では、振内町近辺と岩知志地域で地すべりが多発しており、平取町のイワチシ川に沿った形で 3 か所大規模なもの（広範囲に及ぶもの）が確認された。日高町の北日高岳においても多発し、最上流部には、ウエンザル川の下流側にある清瀬橋と岩瀬橋の間で 1 か所確認できた。

4. 考察とまとめ

ここでは、アイヌ文化が多く残る日高地方の沙流川流域を対象として、災害に繋がる意味をもつ言葉を含むア

イヌ語地名と災害史を整理し、各々の結果（2 章及び 3 章）を比較してみる。

下流部においては、昭和 37 年、昭和 56 年の被災地域のすぐ上流に位置する荷菜地区周辺では松浦において洪水や土砂崩れを意味する地名の存在が複数確認でき、氾濫や洪水が起きた紫雲古津や富川など河口付近では、崖崩れを意味する地名は存在したが、直接的に水害を表す地名は確認できなかった。また、荷負及び貫気別川周辺においては、流木や水が濁ることが地名として残っているが、平成 15 年の災害のときにはこの地域を中心として大量の流木が発生したこともわかっており、過去に起きた地すべりの痕跡も複数確認できた。また、ウエンザル川では、平成 28 年の災害による爪痕が確認されたが、逆に、トウナイ川やルケップ、ホロカウエンサラなど荷負から日高町においては、災害を表す地名はあるものの有史以来では目立った被災は記録されてない。また、2 章で紹介したカンカンが看看川を表しているのであれば、看看川は二風谷ダムに直接繋がれており、名前の通り、氾濫したとしてもダムの能力によって被害が抑えられている可能性が考えられる。

以上のことから、アイヌ語地名と実際に起きた災害には少なからず重なる部分があると言える。そのため、アイヌ語地名の由来を調べることで、その地域の災害を知ることができ、防災教育にこれを取り入れることで、自然に目を向け、そこから危険性や災害リスクを見分ける力を育むことにも繋がるものと考えられる。また、アイヌ語地名では災害に繋がる意味をもっているが、実際には目立った災害が起きていない地域には、潜在的に災害の危険性を有している可能性と、これまでの河川事業の効果で災害の危険性が低下した可能性があるものと考えられる。

本稿では定性的な結論のみとなったが、今後は、面積やデータ数など定量的にアイヌ語地名と災害史の関連性を示す予定である。

謝辞：国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部には、本研究を遂行する上での貴重な資料をご提供頂きました。ここに記して謝意を表します。

参考文献

- 1) 山田秀三: 北海道の地名, 草風館, pp. 356-368
- 2) 平取町: 平取町百年史, 平取町史編集委員会編集, pp. 47-89
- 3) 南哲行: アイヌ口碑伝説等により伝承された大規模災害の検証と現在の防災・減災対策への適用性に関する研究, 北海道開発協会開発調査総合研究所, 助成研究論文集, pp. 175-202, 2014.
- 4) 沙流川歴史館: 沙流川歴史館年報第 2 号, 2001.
- 5) 北海道開発局室蘭開発建設部: 鶴川・沙流川治水史, 財団法人北海道開発協会発行, pp. 116-134
- 6) 土木学会水工学委員会平成 15 年台風 10 号北海道豪雨災害調査団: 平成 15 年台風 10 号北海道豪雨災害調査団報告書, pp. 45-95
- 7) 土木学会 2016 年 8 月北海道豪雨災害調査団: 2016 年 8 月北海道豪雨災害調査団報告書 pp.131-137, <http://committees.jsce.or.jp/report/taxonomy/term/50> (2017.11.27 参照).
- 8) 山岸宏光: 北海道の地すべり地形, 北海道大学図書刊行会発行, 地すべり学会北海道支部監修, <http://webgis.hro.or.jp/hrogis/apps/webappviewer/index.html?id=f00cc67fbb0c4d4d8728b800ac468f46> (2017.11.29 参照).